

表 白 (宣 誓)

このたび、真宗大谷派第二十六代門首の座を継承するにあたり、宗祖親鸞聖人の御影前に申し上げます。

親鸞聖人が、真実の教『大無量寿経』によって、浄土真宗とは、本願の名号を行信する道であることを証され、人類平等の救いを全うする普遍の大道であると開顕されました。この教えを正しく受け伝えることを願い、御同朋は本願寺教団を護持してこられました。

真宗大谷派宗憲前文には、

「この宗門は、本願寺を真宗本廟と敬仰する聞法者の歓喜と謝念とによって伝承護持されてきたのであり、宗祖聖人の血統を継ぐ本願寺歴代は、聖人の門弟の負託に応えて本廟留守の重任に当られた。中興蓮如上人もまた、自ら大谷本願寺御影堂留守職として、専ら御同朋御同行の交わりの中において立教開宗の本義を闡明して、真宗再興を成し遂げられた」と宣言しております。

私は、二〇一一年十一月、鍵役・開教司教に任命され、二〇一四年四月には門首後継者に選定され、二〇一五年より日本で暮らすことになりました。ブラジル育ちである私が、今日まで歩みを進めることができましたのは、多くの方々のお支えによるものであります。取り分け、御同朋と共に歩まんとされる大谷暢顯前門の後ろ姿に、報恩の願いに生きることを教えていただきました。前門首が、「宗憲」を遵守し、新たな時代の門首のすがたを示され、本廟護持の一念によって責務を全うされたことに、深甚の敬意と謝意を申し上げます。

宗派では、二〇二三年に宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をお迎えします。五十年前の慶讃法要は、一九六九年の開申に始まる混乱の中で勤められました。その間、先人方は、同朋会運動の意味をより深くたずねつつ、「親鸞聖人の世界」「真宗の教相」を明確にする教学・教化の営みを尽くして下さいました。苦難は、仏道そのものを妨げるものではないということを自らの歩みをもって示されたのです。

現代の社会には、貧困・差別・格差に苦しむ人々、不安

と孤独に悩む数限りない多くの人々がおられます。一方で、年齢を問わぬ宗教離れ・寺離れという問題があります。これらの現実から、私ども宗教者は何を問われているのでしょうか。いま、これらの問いに真摯に向かい、親鸞聖人が開顕された本願念仏の教えに出遇うことが願われています。親鸞聖人の越後流罪、関東での生活、現実から問われる求道なくして真宗の開顕はありませんでした。

宗派では、社会の諸相を見つめつつ、慶讃法要の意義を現代に明確にする願いをもって、慶讃テーマ「南無阿弥陀仏人と生まれたことの意味をたずねていこう」を掲げました。人間を人間の知性からではなく、仏のまなざしの深みから問い返し、人と生まれたことの意味を回復することが願われています。念仏において、人とは何かが明らかになるのです。殊に、現代のような科学技術の進歩した社会の中にあって、科学技術を使う側の人間を支えるのは、真実の宗教心でなければなりません。人に生の実感を与えるのが宗教者であり、その宗教心を現代に明らかにすることが、宗教者に求められています。国・人種・性別・年齢を問わない平等なる宗教心は、法蔵菩薩の願心に教えられます。

人生が念仏に始まり、人生を終える時、念仏の世界に帰る。この真宗の教え、「南無阿弥陀仏」を世界中の人々に届けることが、真宗にご縁をいただいた私どもの大切な使命です。念仏の僧伽は、人に、立ち上がって生きる力を生みます。念仏の僧伽の精神が、一人ひとりに相続されていくことを願って止みません。

私自身、尊いご縁に出会えたことを感謝しつつ、宗門人の願いが結実した「宗憲」を遵守し、真宗の教法を聞思し、仏祖崇敬の任にあたり、同朋社会の実現を期すことを、ここに宗祖の御真影の御前に誓います。

如来の矜哀を蒙り、親鸞聖人が開顕された念仏の教えの恩徳を感じつつ、御同朋の変わらぬお支えを心より願うものであります。

二〇二〇年十一月二十日

釋 修 如